

平成 21 年 6 月 17 日現在

研究種目：若手研究 B

研究期間：2006 年度～2008 年度

課題番号：18720021

研究課題名（和文）

近代日本における沖縄の包摂と排除——柳田国男と伊波普猷をめぐる思想連鎖

研究課題名（英文）

Inclusion and Exclusion of Okinawa in Modern Japan-----a study of interaction between Yanagita Kunio and Ifa Fuyu

研究代表者

三笥 利幸 (MITOMA TOSHIYUKI)

九州国際大学・経済学部・准教授

研究者番号：60412615

研究成果の概要：本研究は、柳田国男と伊波普猷からはじまる思想連鎖という観点によって、近代日本における沖縄の位置を、排除と包摂を同時にはらんだダイナミックな思想史として明らかにしようとするものである。彼らのテキストに沈潜しつつ、個々の論点においても既存の解釈の再検討を行い、とくに「日琉同祖論」にこだわりながら研究を進めた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	2,000,000	0	2,000,000
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	210,000	3,710,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：沖縄、排除／包摂、日琉同祖論、民俗学、南島

1. 研究開始当初の背景

(1)沖縄は「琉球処分」以降、近代日本の国民国家の枠組みに編入させられながら旧慣温存策がとられ、制度的に差別的な処遇を受けた。その後、凄惨さをきわめた沖縄戦を経験し、戦後は 1972 年に「復帰」するまでの間、アメリカの軍政下にあった。こうした歴史を見れば、沖縄が近代国民国家の「辺境」の位

置にあつて、その論理に翻弄されてきたことは明らかである。こうした沖縄の位置を考える際に、政治制度的な権力関係から日本と沖縄を支配・被支配の一方向的な関係だけで捉えては、かえって重要な問題を捉え損なってしまう。

(2)柳田に関しては、すでにその「一国民俗学」

的な性格を読み取り、支配者の眼差しを読み取って批判を行う論調がある。いっぽう、伊波および「沖縄学」は、日本文化との類同性の追求と同化を志向することに終始したと結論づけられることが多い。しかし、こうした見解は、「日本(人)」対「沖縄(人)」という二項対立を前提して、そのどちらにも分類されない人々や単純な分類では捉えられない思想的な力学にみずから目隠しをしてしまう単純な議論へと陥りがちである。

(3)あきらかにされるべきは、沖縄を包摂しながら排除するという矛盾した力学が生み出されていき、また、沖縄にもそうした力学に呼応しながら抵抗していくという思想が生まれていく、そうしたダイナミックな思想連鎖である。

2. 研究の目的

(1)沖縄を包摂しながら排除するという矛盾した力学が生み出されていき、また、沖縄にもそうした力学に呼応しながら抵抗していくという思想が生まれていく、そうしたダイナミックな思想連鎖を明らかにする。

(2)考察の軸として取り上げるのは、柳田国男と伊波普猷である。柳田と伊波は 1921 年に柳田が沖縄を旅したときに直接面会して以降、親交を深め、柳田が民俗学を確立していくのにちょうど応ずるように、伊波は沖縄学を確立していった。この両者の間に見られる思想連鎖を剔抉する。

(3)柳田と伊波の思想連鎖を明らかにしたうえで、今度は、彼らの思想連鎖にさらに連なりながら紡ぎ出されていくさまざまな言説

の検討を行う。柳田と伊波の思想連鎖をひとつの磁場として紡ぎ出される「沖縄」に関する思想史をトータルに描き出す。

(4)制度的な政治統合の側面や、標準語使用の強制といった言語や教育などの文化統合の側面も十分に考慮する。

3. 研究の方法

(1)柳田国男および伊波普猷について、精緻なテキスト・クリティークを行いながら、彼らの思想を明らかにしていく。それぞれの思想が当時の状況にどう絡みながら展開されていったのかに十分注意しながら考察を加える。

(2)具体的には『柳田国男全集』および『伊波普猷全集』を中心とするテキストを使用する。さらに、伊波の原テキストが掲載される場合も多く、また、時代状況を知るために、『琉球新報』などの新聞にもあたる。

(3)それぞれの全集に収録されていないもの、入手困難な資料に関しては、在沖縄図書館での資料調査、あるいは国会図書館をはじめとした図書館で調査を行う。

4. 研究成果

(1)伊波普猷の思想形成にかんする、初期の研究を行って、1900 年頃からまず伊波が「日琉同祖論」を形成していく過程をあきらかにした。伊波の唱える「日琉同祖論」は、最初期には、B. H. チェンバレンに依拠しながら形成されたのであり、向象賢に言及するのは時期がずれることを指摘した。

(2)伊波は、向象賢を「発見」し、みずからの「日琉同祖論」に組み入れていく。その際、とくに重視するのが『羽地仕置』であるが、このことについてはしばしば批判があった。すなわち、伊波が「日琉同祖論」として依拠する『羽地仕置』の当該箇所は、そもそも「日琉同祖論」が主たる議論ではないにもかかわらず、伊波がそれをひとつの学説として取りあげているというものである。しかし、伊波の諸論考にみられる変化を追っていくと、伊波は、最初期には向象賢の「日琉同祖論」にたいして、「日本崇拜の時代」の主張であることを心得ておくべきであると留保をつけていた（のちに、この留保はなくなる）。必ずしも、ただちに伊波が向象賢の説を「学説」として受け入れたのではなく、むしろ、あるところから向象賢を「発見」し、「日琉同祖論」の「最初」であると決断したと指摘した。また、この変化を受けて、「日琉同祖論」がどのように展開していくかを、後続の論文を用意している。

(3)伊波の「日琉同祖論」は、「日本人」の南漸を主張するものである。しかし、伊波のちに柳田と出会い、その思想的影響を受けることによって、南漸説を変更していく。また、柳田は沖縄を「発見」し、その民俗学を体系化していくなかで沖縄を「古日本の鏡」（屋嘉比取）の位置に置いていく。こうした柳田の民俗学の大きな磁場のなかに伊波が入り込みながら、しかし、伊波の「沖縄学」が生み出されていく過程を、柳田、伊波、それぞれのテキストを時系列的に追う作業を進めており、今後順次論文として発表していく。しばしば、柳田を一国民俗学として、伊波を沖縄の独自性を説いた沖縄学の祖として、それぞれ単線的・類型的にとらえてしまう議論

が多いなか、この研究を発表していくことで、それぞれの細部に入りつつ、彼らの言説が引き合いながら矛盾する力学に動かされつつ、形成されていったことが明らかになると思われる。

(4)伊波の思想展開を追うために、「沖縄人の祖先に就て」という論考を復刻した。この論考は、1906年に『琉球新報』に掲載されたものであり、その後、彼の生涯を通じて幾度も改訂されながら中心的な位置にあった論考の一つである。この『琉球新報』版は、その意味では伊波の思想的な出発点とも言うべき位置にあるものであるが、地方紙でもあり、また100年以上前のものであるため、簡単に閲覧することができない。『沖縄県史』に復刻されたことがあるが、不備も多く、今回、この『琉球新報』版を原典に出来る限り忠実に復刻し、また、後に改訂されて第Ⅰ論文としておさめられた『古琉球』版との異動がはっきり分かるよう編集した。この復刻・編集は今後の伊波にかんする基礎的研究に資するところが大きいと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 三笠利幸、伊波普猷の「日琉同祖論」をめぐって——書記の思想形成と変化を追う試み(1)、『九州国際大学社会文化研究所紀要』、第62巻、47-72ページ、2008年、査読無
- ② 伊波普猷著・三笠利幸編、沖縄人の祖先に就て、『九州国際大学 教養研究』、第15巻第1号、177-212ページ、2008年、査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三笥 利幸 (MITOMA TOSHIYUKI)

九州国際大学・経済学部・准教授

研究者番号：60412615

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

